

Title	常微分方程式ノ解ノ單獨條件ニ就テ
Author(s)	福原, 満洲雄
Citation	全国紙上数学談話会. 43 p.1-p.5
Issue Date	1935-05-28
oaire:version	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/74064
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

142. 常微分方程式ノ解ノ單獨條件ニ就テ

福原満洲雄(北大)

前回デ、從來ハ

$$(1) \quad \frac{dy}{dx} = f(x, y)$$

ニ關スル解ノ單獨條件ヲ

$$(2) \quad |f(x, y_1) - f(x, y_2)| \leq F(x, y_1 - y_2)$$

ナル形デ求メテ居タガ、サウイフ形ヲ持タナイ單獨條件が得ラレル客デアレコトヲ述ベタ。此ノ問題ニ關シテ未ダ纏ツタ結果ヲ得テ居ナイノデアレカラ簡單ナ場合ヲ例ニ取ツテ、私ノ考ヘヲ荒削リノママ述マルコトニスル。変數ハ勿論實トスル。

— 1 —

一般ニ

$$(3) \quad \frac{dy}{dx} = G(y)$$

ニ於テ $G(y)$ が y_0 デ連続デ $0 =$ 等シクナケレバ此ノ微分方程式ハ $y(x_0) = y_0$ ヲ満足スル解ヲ唯一ツ持ツノデアレカラ、一般ニ $f(x, y)$ が (x_0, y_0) デ連続デ $0 =$ 等シクナク且ツ

$$(4) \quad f(x, y_1) - f(x, y_2) < G(y_1) - G(y_2) \quad (y_1 > y_2)$$

ヲ満足シテ居レバ $y(x_0) = y_0$ ヲ満足スル

$$\frac{dy}{dx} = f(x, y)$$

— 1 —

ノ解ハ唯一ツデアルトハ言ヘナイデアラウカ? カウイフ疑問
 が起ルノハ當然デアルガ、ソレヲ解クニ當ツテ從來ノ方法ハ
 役ニ立タナイヤウニ見エル。其ノ理由ノ説明ナド結果ニ重キ
 ヲ置ク人ニ取ツテハツマラナイコトカモ知レナイガ、問題発
 生ノ原因ヲ究明スルコトモ決シテ輕々ニ看過スベキデアナカ
 ラウシ、ソレガドウイフ風ニ發展スベキカトイフコトノ考察
 モ急ツテハナラナイト思ヒ説明ヲ附ケ加ヘルノデアル。

條件(4)ノ形ヲ見テ、ソレガ(2)ノ形ニナラナイカラ從來
 ノ方法ヲハ駄目ト結論スルノハ早過ぎル、ト云フノハ *Montel*
 (方程式ガーツノ場合), *Marchaud* (聯立方程式ノ場合)
 等ハ條件ヲ

$$(5) \quad f(x, y) - f(x, y_1(x)) \leq F(x, y_1(x), y - y_1(x))$$

ナル形ニシテ居ル、茲ニ $y_1(x)$ ハ(1)ノーツノ解デアル、
 條件ヲ

$$f(x, y) \leq F(x, y)$$

ナル形ニシテ $f(x, 0) = 0$ ト假定シ $y_1(x_0) = 0$ ヲ満足ス
 ル(1)ノ解ヲ考ヘテモ本質的ニハ同ジデアル。此ノ方が式ガ
 簡單ニナルカラ私ハ常ニ此ノ形ヲ論ジテ居ル。

$$F(x, y, z) = G(y+z) - G(z)$$

ト置クコトニヨリ條件(4)ノ場合ガ合マレル。ソレデアハ條件
 (4)ヲ論ズルコトガ出來ルノカト思フト、ソウ簡單ニ行カナ
 イ。 $y_1(x)$ ヲ $y_1(x_0) = y_0$ ヲ満足スル(1)ノーツノ解ト
 シタ時

$$(6) \quad \frac{dz}{dx} = G(z + y_1(x)) - G(y_1(x))$$

が $z=0$ より他 $= z(x_0)=0$ を満足スル解ヲ持タナイナラバ (1) = 関スル解ノ單獨性が証明サレル。併シ解ノ單獨性が分ツテ居ルノハ (3) デアツテ (6) デハナイ、從來ノ方法ヲ直接 = 條件 (4) = 應用スルコトが出来ナイ理由ハココニアル、敢テ直接 = トイフワケハ変数ノ變換ヲ施シテカラナラバ應用出来ルカラデアアル。

- 2 -

成ルベク簡道ガハツキリ分ルマデ $= f(x_0, y_0) = 1$,
 $G(y_0) = 1$, $x_0 = y_0 = 0$ トシテ置ク、 $y(x_0) = y_0$ を満足スル

$$(7) \quad \frac{dy}{dx} = G(y) + h(x) \quad [h(x_0) = 0]$$

ノ解ガ二ツアルトシ、其等ヲ $\varphi(x)$, $\psi(x)$ デ表ハセバ $\varphi(x)$, $\psi(x)$ ハ

$$\varphi(x) = x(1 + \varphi_1(x)), \quad \psi(x) = x(1 + \psi_1(x))$$

ナル形ニ表ハサレル。茲ニ $\varphi_1(x)$, $\psi_1(x)$ ハ $x=0$ デ 0 =ナル連続ナル函数デアアル。

$\varphi_1(x)$, $\psi_1(x)$ ハ

$$x(1 + \eta) = y$$

ナル變換ニ依ツテ得ラレル方程式

$$(8) \quad \frac{d\eta}{dx} = -\frac{\eta+1-G(x(1+\eta))-h(x)}{x}$$

ノ解デアアル、此ノ方程式ニ関スル解ノ單獨性が分レバ

$\varphi_1(x) = \psi_1(x)$ 従ツテ $\varphi(x) = \psi(x)$ トナル。(7)ニ関スル解ノ單獨性が分レバ (4) が (1)ニ関スル解ノ單獨條件ニナルコトヲ知ル。(8)ニ関スル解ノ單獨性が分ル簡單ナ場合ハ

$$\lim_{x \rightarrow 0} x G'(x) = 0$$

ニ依テ與ヘラレル、此ノ時ニハ (8)ノ右辺が η ノ減少函数トナルカラデアアル、前回ニ挙ゲタ例

$$G(y) = \sqrt{|y|} + \varepsilon y \hat{o} s \hat{u}$$

ハ此ノ條件ヲ滿タシテキル。

コンナワケデ從來ノ理論ガ基礎ニナルコトニ變リハナイが、ソレヲ直接ニ應用シヨウトスルト無理ガ起リ適當ナ變換ヲ豫メ施シテ置クト都合ガヨイ場合ガ起リ得ル。ソレハ兎ニ角トシテ、(4)ヨリモツト廣イ形ノ單獨條件モ求メラレルガココマデ來レバ更ニ變ツタ現象ガアレワケデハナイカラ此ノ問題ハ此ノ辺デ一先ツ筆ヲ擱ク。

— 3 —

最後ニ解ノ單獨條件ヲ証明スルノニ変數ノ變換ヲ利用スルコトハ己ニ 1930年ノ日本數學輯報ヲ南雲氏がヤツテ居ラレルコトヲ注意シテ置キタイ、其処デハソレマデニ得テレタ解

ノ單獨條件ヲ簡單ニ求メラレコトヲ示シテ居ルハ新シイ形
ノモノヲ出シテ居ナイノデ案外注目ヲ惹イテ居ナイデハナイ
カト思ツテ一言附記スレ次第デス。

前田(40号)ノ正誤

4頁下カラ7行目

$$\frac{dy}{dx} = X$$

$$\frac{d\eta}{dx} = X$$